

第2部： 特別講演 Rhan 2: Y Ddarlith Arbennig

産業革命期ウェールズ民衆運動史のひとこま；  
1831年マーサー暴動を中心にして

帝塚山大学経済学部 梶本元信

**On the Popular Movement in Wales during the Industrial  
Revolution Period ; the Merthyr Rising of 1831**

**Motonobu Kajimoto**

Merthyr Tydfil used to be the world's largest iron-producing town during the Industrial Revolution Period. This was accomplished by English iron-masters who established four big iron companies in the town. However, in contrast to extravagant lifestyles of the English iron-masters, most Welsh employees were forced to live in cramped unhealthy living quarters. This radical town was faced constant strikes and riots, the most violent of which was the Rising of 1831. Through the depiction of the rising, I anticipate a glimpse into the lives of Welsh working class people during the Industrial Revolution Period. This paper discusses three issues. First, political, ideological and economical causes of the rising. Second, the process of the rising in relation to the Reform Act of 1832. Third, the story of Richard Lewis (Dic Penderyn) executed in Cardiff for stabbing a soldier during the rising becoming the first hero of Welsh laboring people.

本報告では、1831年6月に勃発したマーサー暴動(the Merthyr Rising)の概要を紹介することを通じて、産業革命期ウェールズにおける民衆運動について若干の考察を加えた。以下、簡単にその報告内容を要約しておこう。

南ウェールズ炭田の北辺に立地するマーサー・ティドヴィルは一時世界最大の製鉄都市として繁栄した。大製鉄所（カヴァースヴァ、ダウレス、ペニダレン、プリマス）がイングランド出身の企業家により設立され、その生産物はグラモーガンシャー運河、後にはタフ・ヴェール鉄道によって、カーディフまで輸送され、そこから不定期船でイギリス各地、さらには海外へと積み出された。南ウェールズは19世紀前半にイギリス全体の銑鉄生産のうち、35～40%のシェアを維持し、その中心都市マーサーは世界最大の製鉄の町として繁栄した。産業革命の進展に伴って、各地から移住者が流入した。製鉄会社の経営者のほとんどがイングランド出身であったのに対し、労働者の多くは、近隣の農村地

梶本元信「産業革命期ウェールズ民衆運動史のひとつま；  
1831年マーサー暴動を中心にして」

帯から移住してきたウェールズ人であった。製鉄所の経営者たちは英語を話し、大邸宅に住み、贅沢な生活を謳歌したが、労働者たちは、ウェールズ語を話し、長時間重労働に従事した。居住環境は悪化し、トイレや上下水道、排水施設などのインフラは極度に不足していた。治安も悪く、慢性的警官不足により、暴動が起こるたびに軍隊や市民義勇兵が動員された。しかし軍隊の出動は住民の当局への不信感を増し、住民の問題は住民自身によって解決するという伝統が維持された。共同体の道義に反し、秩序を乱す行為をおこなった者に対する一種の制裁措置としてのケヴァル・プレ(Ceffyl Pren=木馬)の慣習はその顕著な表れであった。

さて、1831年6月に勃発したマーサー暴動の原因を大きく分けると〔1〕政治的・思想的原因と〔2〕経済的原因に分けることができる。本報告では〔1〕の原因としてマーサー・ティドヴィルにおける急進的宗教や思想の普及を取り上げ、〔2〕の原因として①労働者の貧困問題、②トラック・システム、③景気循環の影響、④友愛組合、そして暴動への直接的引き金としての⑤ウィリアム・クローシェイ2世の行動に言及した。これらの諸要因のうち報告者が特に重視したのはこのうち、③~⑤であった。暴動の原因は暴動の主体と密接に関係している。マーサー暴動には数多くの製鉄業や炭鉱労働者が関係していた。もちろん貧困に喘ぐ不熟練労働者や日雇い労働者も暴動に加わったが、彼らのリーダーとなったのはどちらかといえば、熟練労働者や職人たちであったと思われる。彼らは決して救貧院や生活補助に依存する最下層労働者ではなかった。暴動の経済的原因の一つとして多くの論者はトラック・システムを非難するが、報告者はそれには若干疑問をもっている。なおトラック・システムとは、賃金の支払い方法として、現金の代わりに現物、あるいは特別のチケットやコインで支給するやり方であり、労働者はそれらをトミー・ショップと呼ばれる工場や工事現場の売店で生活必需品と交換した。トミー・ショップは会社ないしはその受託者が経営する売店で、町の商店に比べて割高で商品の質が劣るといのが一般的見解であった。トラック・システムは、僻地の工場や人里はなれた田舎の鉄道建設現場で採用された。工場経営者は労働者への賃金支払いに必要な現金を節約し、同時に労働者への生活必需品の独占的販売による利益を得ることが可能であった。確かにマーサーの製鉄業者も一部の者（ダウレスとペンダレン製鉄所）はトラック・システムを採用した。しかし、その制度が必ずしも労働者の搾取に悪用されたとは言い切れない。ダウレス製鉄所ではむしろその逆で、労働者の福祉・厚生政策の一環として採用された。

報告者はむしろ製鉄業労働者の賃金の不安定を重視した。彼らの賃金は西部の農業労働者に比べてはるかに高額であったが、反面極めて不安定で、不況期

に経営者は躊躇なく賃金を切り下げ、余剰人員を解雇した。他方マーサーでは数多くの奢侈品を中心とする店舗が開設され、労働者の消費意欲を煽った。その結果数多くの労働者が借金生活を余儀なくされた。加えて請願裁判所(Court of Requests)の設置(1808年)により、債権者が債務者から家具類を強制的に取り上げ、負債を回復することが容易になったが、その裁判所は借金に苦しむ労働者の憎しみの的となったのである。

暴動の拡大という点で無視できないのが19世紀前半に結成された数多くのクラブや友愛組合である。それらの中には多くの職人や労働者の組織も含まれていた。ドット・ジョーンズのグラモーガンシャー全体にわたる友愛組合の研究によると、マーサー暴動の翌年(1832年)にこの州全体の人口の少なくとも13%が友愛組合に加入していた。この数値は最小値であって、実際には数多くの未登録の友愛組合が存在した。それらの中にはかなりの数の職人や労働者の団体も含まれていた。ジョーンズの推定では19世紀前半に労働者の半分近くが友愛組合に加盟していた。友愛組合の活動は疾病、老齢、死亡、あるいは失業などの不慮の事態に備えて、メンバー間の共済をその主たる目的であったが、彼らが定期的に集会の場として利用したパブはメンバー達の情報交換の場となり、労働者間の公式・非公式のネットワークの形成と普及が暴動の拡大に貢献したと思われる。

さてマーサー暴動勃発のきっかけは、カヴァースヴァ製鉄所の経営者、ウィリアム・クロージェイ2世の奇怪とも思われる行動によって与えられた。ウィリアム2世は、父親のウィリアム1世からカヴァースヴァ製鉄所の経営を引き継ぎ、彼の兄弟や親族が所有する株式を取得することによって、同製鉄所の独裁的経営者となった。ウィリアム1世は創業者のリチャード譲りの質素儉約主義者であったが、息子のウィリアム2世は並外れた華やかな生活を好んだ。その代表的な事例がカヴァースヴァ城の建築(1825年)であった。また、クロージェイ家は先祖代々国教徒であったが、ウィリアム2世はユニテリアンや急進思想に引かれ、急進思想のクラブであるカヴァースヴァ哲学協会を支援した。また選挙法改正キャンペーン運動に際してカヴァースヴァ製鉄所の労働者を駆り立てた。彼はまた、クロージェイ家の伝統を引き継いでトラック・システムの反対者であったし、他の製鉄業者の経営戦略と正反対に、不況に際して、製品価格を切り下げたり、労働者の賃金を下げたりせず、むしろ在庫を増やし、賃金と雇用を維持する政策を採用した。もしウィリアム2世が終始徹底してこの政策に固執していたならば、模範的経営者として労働者に愛され続けたであろうが、1831年には今までの労働者への信頼を反故にし、逆に大きな怒りを爆発させる行動にでた。当時、ウィリアム2世は、カヴァースヴァ製鉄所の他にハ

梶本元信「産業革命期ウェールズ民衆運動史のひとつま；  
1831年マーサー暴動を中心にして」

一ウェインにも製鉄所をもっていた。とりわけハーウェイン工場は赤字で操業していた。不況の深刻化に伴う経営悪化に直面して、3月28日にウィリアム2世はカヴァースヴァとハーウェイン工場の鉄鉱石鉱山労働者のトン当たり賃金を3ペンス～7ペンス引き下げることを通告した。さらに5月24日にはロンドンの父親の命令に従って、84人のパドラーを解雇した。こうしたウィリアム・クロージェイ2世の行動は、労働者への裏切りと映っても当然であった。

なお、暴動の経過について、ここでは下の年表を提示し、その記述は省略する。

表 マーサー暴動の経過(1831年)

月／日	主な出来事
3月1日	選挙法改革法案下院に提出、否決。下院解散。
3月28日	ウィリアム・クロージェイ2世、カヴァースヴァ製鉄所労働者の賃金削減
4月28日	下院選挙。ウィッグ党の勝利
5月9日	カヴァースヴァ製鉄所の労働者を中心とする選挙法改正キャンペーン 主導者逮捕。群衆が裁判所に押しかけ、主導者解放(～10日)
5月24日	ウィリアム・クロージェイ2世、84人のパドラーを解雇
5月30日	マーサーの北東部(Waun Hill)での労働者集会。
5月31日	アバーデアでの労働者集会
6月1日	暴徒による行進、略奪活動開始
6月2日	掠奪活動活発化。裁判所書記(ジョセフ・コフィン)の家屋略奪。 治安判事(J.B.ブルース)軍隊・義勇兵の出動要請
6月3日	キャッスル・イン(当初の対策本部)での暴徒と軍隊の闘争(市民20人以上死亡)。町役人や治安判事、対策本部と軍隊の駐屯地をペンダレン・ハウスに移動。近隣のアバーデアやハーウェインでも暴動波及
6月4日	町の周辺(ケヴン・コイド、ハーウェインなど)で暴徒と軍隊・義勇兵の衝突。スウォンジーからの騎兵軍団敗退。軍隊増援続く。
6月5日	マーサーの労働者による周辺地域の製鉄所・炭鉱労働者へのストライキ扇動
6月6日	ダウレスでの暴徒と軍隊の対面。J.J.ゲストによる退散説得。暴徒退散。
6月7日	労働者仕事に復帰。暴動主導者の逮捕開始

7月13日	グラモーガン四季裁判所での裁判開始
8月13日	リチャード・ルイス (ディックペンデリン)カーディフにて絞首刑

〔出所〕Williams G. A., *The Merthyr Rising*, University of Wales Press(1988); Jones D., *Before Rebecca*, Chapter 6.The Merthyr Riots of 1831; Egan D. ,*People Protest and Politics; Case Studies in Ninetenth Century Wales*, Gomer Press,(1987)より作成

〔3〕殉教者；ディック・ペンデリン。本報告で最後に取り上げたのは、この暴動で唯一死刑に処せられたディック・ペンデリンこと、リチャード・ルイスを取り上げ、何故彼がウェールズの労働者の英雄になったかという疑問を考察した。暴動主導者を裁くグラモーガン夏期巡回裁判(Glamorgan Summer Assizes)において、総勢28人の被告が有罪判決となった。そのうち2人の被告、リチャード・ルイス (ディック・ペンデリン)、ルイス・ルイス死刑判決を受け、他は流刑や懲役刑に処せられた。死刑判決を受けた2人のうち、ルイル・ルイスは終身流刑に減刑され、結局リチャード・ルイスのみが絞首刑に処せられた。しかし、わずか23歳で、しかも無実の罪で処刑されたこともあり、ディックに対するウェールズの人々の同情心は時とともに熱くなっていった。こうしてディックはウェールズ人の間で、歴史を超えた永遠の殉教者、ウェールズを代表する英雄の一人としての地位を獲得していったのである。